
月夜に踊れ

アヤタカ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

月夜に踊れ

【Nコード】

N0732R

【作者名】

アヤタカ

【あらすじ】

10年前の小学校2年の一ヶ月の記憶が御堂綾鷹みどう あやたかにはない。大事な何かを約束したような気がするのに。

あれから10年普通に過ごしていた俺は幸せだったのだろうか？

「やあ、とんでもない所に巻き込まれてしまったみたいだね」

黒い服の女との出会い俺の世界の現実を変えていく。

過去の出会いと新しい出会いが絡まり記憶が紐解かれる時、人の欲望と災いは街を狂わせて行く。

俺は何の為に力を求め、何の為に力を振るうのだろうか。

ヴァンパイアと不老不死を求める者達の戦い。

プロローグ 記憶喪失の過去

<プロローグ>

月が輝く真夏の深夜。

絶対に近づいてはいけなと言われていた山の斜面に埋められるようにして建てられている祠。

張り巡らされた御札がその異質な存在を際立たせる。

神社と異なり鳥居も存在しない祠。

いつものように観音開きの戸を開けると古い仏像が出迎える。

その仏像を誰も回りにいないことを確認するとゆつくりと横にずらす。

仏像に隠れるようにしてその背後に存在する子供が何とか入れるだけの大きさの穴。

その穴をゆつくりと進んだ先に現れる隠された石室。

青白い石室の部屋の奥、和の封印に不釣り合いな祭壇と黒い棺。

その黒い棺の前に立つと少年は歌を歌った。

学校で習ったばかりの歌。

『ほう・・・いい歌だ。』

誰も居ないはずの部屋に声がする。

「まだ全部は覚えていないんだけどね。聞かせてあげたくて」

この場所を発見してから一ヶ月、毎日のように会いに来る少年を女は複雑な気持ちで毎回迎えていたのだが少年には知る由もない。

『初めて来た時は怯えていたくせに、いつの間にか毎日来るようになるとは。』

ため息がつけるものならば盛大なため息をついてみせたであろう。

「でも、おばさん優しいし。」

『だ・れ・が・おばさんだ!』

少年は耳を塞ぐ。

『無駄だ。直接脳に語りかけているからな。反省しろ。』

「でも、ずっとこの中にいるんでしょ？」

コンコンツと棺を叩く。

『……まー確かに長くいるが。』

女はむうと唸ると沈黙する。

声の主は黒い棺から声を出しているらしい。

この祠が立てられたのは少年の調べではペリー来航以降の1860年頃

だということなので150年は経っているだろう。

いつからこの場所ができたのかは文献も残っていないければ誰に聞いても知らないとの事。ただ今年の春この山がどうなるかは少年は知っていた。

少年はまたコンコンツと棺を叩く。

「開けちゃダメなのかな・・・」

『開けるな。私はあと100年は寝ていたいのだ。それに封印されているという事はろくでもないのが中に入っているということだ。災いは世に出すべきではない。』

「変なの。自分のことなのに。」

少年は棺の上に座る。

『お前・・・どこに座っている。』

「・・・ダメ？」

『・・・勝手にしろ。』

「うん。」

嬉しそうに少年は言うがいつもより声のトーンが低い。

『どうしたんだ？元気がないじゃないか。』

少年は少し戸惑った。

言うべきか言わないべきか。

そして、決断する。

「僕、皆を守るヒーローになりたいんだ。それをクラスの皆にそう言ったら・・・」

『ブフツ！・・・ブつくくく・・・』

少年は予想通りの反応に顔を膨らませ棺から下りると棺に張られているお札を爪で剥がし始める。

『まっ、待て・・・私が悪かった！！謝るから・・・くくっひーひっひっわはははは』

ベリッ！！

少年は棺に張られている御札の一枚を思い切り破り取る。

『くくく・・・すまんすまん・・・どんなことかと思えば実に少年らしい悩みではないか。』

「むー」

ベリッ！

『ちよつと待て！またベリッと言ったぞ！今！』

「気のせいだよ。」

ベリッ！

『・・・ちなみに封印はあといくつだ？』

「えっ？あと一枚だよ？縦に二枚と横に二枚と上にはってあったから。」

ベリッ！！

言いながら四枚目のお札を剥がす。残るは最後の一枚にして他とは違い赤い文字で何かを書かれている御札。

『冷静になれ少年、これはお前の為だ。』

最後の一枚をこの話の流れの中で剥がしてしまおうと考えていた少年の動きがピタリと止まる。

それだけ今聞こえた声が冷たく、重く、本気であったのだ。

『男の夢を笑った事については私に非がある。当然少年と言えども男だ。プライドを傷つけてしまったことについて謝らせてもらう。だが最後の一枚を剥がすのだけは辞めておけ。』

少年はそれでも最後の一枚の御札に手をかける。

「僕はヒーローになりたいんだ。おばさんは僕の友達だよね？」

『恋人になら剥がされてもいいが、友達にはダメだ。ということ諦めろ。』

「ならば、恋人になるよ。だからゴメンね。」

『バカッ辞めろッ!!』

ビリッ!!

最後の一枚を剥がす。

「開けるよ?」

『私は非常に機嫌が悪いのだが・・・自分で出る。お前は後ろを向いている。その間に話せ、理由しだいではいくら友達といえどお前を殺さねばならん。』

「友達と思つてはくれていたんだ・・・よかった。」

少年はゆつくりと事情を話す。

春に山が切り崩される事。この祠だけでなく、山の上にある神社さえも壊されマンションやら住宅地にされる事。

ゴトンッ

少年の背後で音がする。

ペタリ・・・ペタリ・・・

裸足で歩く音が近づき真後ろのあたりでピタリと止まる。

「なるほどな・・・私を救う為に私の意志を無視してまで助けようとした訳だな。」

初めて聞く生の声にドキリとしながらも、その凜とした声に引き込まれる。五感の全ての意識を耳に集中させられているような感覚を少年はこの時感じていた。

「納得はしないが理解はした。頭にきているが、気持ちは嬉しい。さてさて、どうしたものか。」

ブログ 記憶喪失の過去（後書き）

こんにちわ。中々と仕事に追われ書けない日々を過ごしている休み関係なく仕事携帯に生活を縛られています。がゆっくりと書いていければと思っております。

ご指摘など色々あれば気軽にお願いします

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0732r/>

月夜に踊れ

2011年10月7日05時22分発行